

1999年4月19日発行

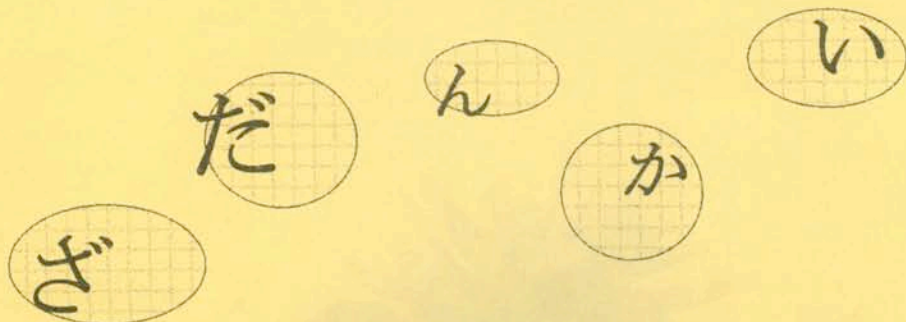


新宿ダンボー 儿村通信

最終号

編集・発行 新宿連絡会

定価 300円



路上のこと、支援のこと

	表紙写真	岡田 知子	
座談会	路上のこと、支援のこと		1
	路上文芸総合雑誌「露宿」創刊！		8
一通の手紙	笠井さんへ	恩田 美代子	9
	新宿写真館	迫川 尚子	11
底	辺下層に組み込まれた 労働者がたどる最下層の環流点	笠井 和明	15

参加者

恩田さん（「新宿路上通信」発行）

笠井さん（新宿連絡会）

笠原さん（新宿連絡会）

橋本さん（写真家）

五十音順

活動屋とは何ぞや

- 笠井 もし活動家の試験があったら、俺は、受からない。
- 笠原 活動家って何だろう。
活動家を気取っている人と活動家って違うなって、
すごい感じたことがあった。
- 笠井 私は活動屋です。
- 笠原 活動屋。うん、分かる気がする。
- 笠井 活動とは・・・レーニンの言葉で、「人はいる。しかし、人はいない」
- 皆 その、心は？
- 笠井 それは・・・、人はいっぱいいるんですよ。可能性はいくらでもある。
でも、可能性を引き伸ばす人がいない。活動も含め、人間の可能性。
誰かが気づかせなくちゃいけない。
- 笠原 それは、ただそこにいるだけで芽生えるものではないんだよね。
心底それについて考える人とか共感する人とかいて・・・。
- 恩田 信頼感だと思うなあ。信頼する人がいると大きいよね。
- 笠井 いやいやいや、基本的に美意識がないと活動は・・・。
美意識とはね、太陽が流れるごとく上から下に・・・。
わき水が沸きい出でて・・・。
- 恩田 だからね、笠井さんの連絡会じゃないの。
あんたのじゃないんだから。
- 笠原 こうやって対立意見がある状態が幸せだよな。

笠井 正義感だけで何年もやれる。それも、いいんだけど。
笠原 それじゃ、続けられない人は何も言えなくなってしまうよ。
私はいい。オンリーワン同盟になりたい。
恩田 なろう。
支援にしても、ただ続けるだけというのは、私は尊敬できない。
笠井 尊敬する人なんて、なかなかいないよね。俺もいないんだよ。
歴史上ならともかく、現存では。
恩田 現存の人で、いるよ。
私ね、駅のトイレを掃除する人っていうのは、尊敬する。
笠原 それは頭が下がるって言う表現の方が適しているんじゃない。
橋本 もっとアートの意味で尊敬する人は？
恩田 人がいやがることをやる人は尊敬する。
笠井 じゃあ、私だ（笑）。
恩田 支援者なんて、自己満足でやっているんだから。
笠井 そうだね。・・・池袋のおっちゃんがこの前ね、
「雪の日にパトロールやりました。これは自己満足かも知れません。
だけどやりました」って言ったのね。
俺、これは真実だと思うの。支援者も、そうでしょ。

路上は、いつも先に行く

恩田 路上ってさあ、本当に汚い世界なんだよ。
どろどろに汚い世界なんだよ。だから、おもしろいんだよ。
それをなかなか分かってもらえないよね。
橋本 利用する感じは、やっぱりイヤじゃない。
利用するっていうか、自分のやっていることをプラスにもっていくというか、
メディアの力に乗っていくというのは・・・。
そこから外れて、路上が汚れているっていう世界・・・。
恩田 汚らしいことの方が、圧倒的に多いんだよね。
笠井 そこでやっぱり、ダイヤモンドの原石を磨かなくてはいけないんですよ、我々は・・・。
ダイヤモンドっていうのは、関係とか、真実、というか・・・。
何もないところで生まれるような、あたたかさ、とかね。
恩田 年末の時に、コンサートやった時、えらい寒かったの。
私の知り合いのミュージシャンが、寒くて、ギターを弾けなくなっちゃたのね。
それで「すみません、寒くてギターを弾けないから、歌います」って、歌ったのね。

そしたら、あるおじさんが私の所に来て、
「あの人、寒くて可哀想だから、渡してくれ」ってほっかいろを持ってきたの。
「それ渡してしまったら、おじさん困るじゃない」って言ったら、いいからって。
自分で渡してもらったんだけど、その知合いがすごい喜んじゃって・・・
その後、私が手紙を出したら、返事に、

「あの時のギャラはほっかいろで十分でした」って。
すごいなあ・・・これが路上だって思って・・・

笠井 そうそう、ボランティアがボランティアされて、
活動屋が活動をやらしてもらいますよ。

橋本 そういう時ってあるよね、たまにね。
俺よりもちよっと先を行っているなあという感じが、すごいするわけで。

笠井 いや、俺なんかもう、数キロ離されてるよ（笑）、一周遅れですよ。
だって、わしら行く前に、不法占拠しちゃうんだよ。

橋本 俺が負けたっていうか、先行ってるっていうか、そういうおっさん、おるもん。
・・・雪がすごく降った日があって、
歌舞伎町で、去年1月の15日くらい、あるおやじが、
普段見たことないおやじだったんだけど、
「雪が降る～」が歌ってね・・・、こいつ何やねんって思って・・・

笠井 その開き直りがすばらしい。

橋本 すごいよね。全然、勝てないもん。
ピンクサロンのようなチラシの棒持ってて、それで、「雪が降る～」って・・・

恩田 いいねえ・・・

橋本 それをなかなかをストレートに撮れない、俺の弱みがあるから・・・

恩田 何にしろ、にじみ出るんだよね。
おじさんたちなんか、通信渡しても、捨てる人いるもんね、ぼいって。
それはそれで、結構うれしかったりするんだよね、正直だなあって。

笠原 ピラなんてしょっちゅう、捨ててあるよね。

笠井 いやあ、あれは楽しいよね。俺がパトロール出ないのは、
てめえで書いた文章配るの、恥ずかしいから。

恩田 私の通信、連絡会のピラよりはままだと思ってるんだけど（笑）。

見えてくる世代、見えない世代

恩田 人間の深みっていうものがあると思うんだ。
人間というのは、そんなにきれいじゃない。

笠井 そうだよ、20代じゃ分かんないんだ。36にならないと(笑)。
突然、全部見えたっていう瞬間があって、もちろん勘違いなんだろうけれど、
何もかも嫌になるような・・・。
それと、人間は挫折をしないと、見えてこない。
挫折とは、自分は何であるかと考えること。

恩田 分かる人は分かるよ、10代でも・・・。

笠井 いや、10代の分かるっていうのは忘れちゃうんだ。

恩田 いや20代でも分かっている人はいる。

笠井 いるかも知れないけど、だいたい忘れちゃうんだ。
・・・、そう、忙しくて。

恩田 違う、違う、年じゃない、年じゃない。

笠井 年というか、人生のサイクルとしてね・・・。自分で必死なわけでしょう。
足固めの時期で・・・、往々にして。30代、暇だからな。

恩田 そんなことないよ。30代一番忙しいんだよ。橋本さんの世代は？。

橋本 いやあ、どうやってねえ、ケツまくろうかとか思う訳よ(笑)。

支援者は友達か、友達ではないのか

恩田 来る人にさあ、看板作った方がいいね。支援者の看板。
「あなたのやっていることは自己満足なんですって自覚して入るように」って。
人のため、までは言わないけど、何かのため、社会のためにとか、
自分以外のためっていう感じの人・・・。

笠井 ああいうのはみんな、宗教の世界にはしっちゃえばいいんだよ。

恩田 そうだねえ。それなら、分かり易い。全然、否定しない。

橋本 それは何、人の中の宗教心をなくせということなの？

恩田 人のために、人の役に立ちたいという気持ちは誰にでもあるのね。
だから、きっと新宿にも来るんだよ。人に認められたい。
でも、それこそ、自己満足。
ところがさ、おじさんたちも同じ事を思っているんだよ。同じ人間だからさ。
人に認められたい。役に立ちたい。
認めて欲しいから、自分の社会的な役割があるから、動く。
でも、支援者がそれを分かってない。
自分たちと同じなんだよね。
自分たちだって人の役に立ちたいと思って、新宿にきてしまうように、

おじさん達だって、ひとの役にたいたいんだよね。

それを分からないのは、同じ人間だと見ていないんだよね。

橋本 がつんと言わせる特効薬はないの？

恩田 それは経験しかないと思った。

「ホームレス」という肩書きは支援者が与えているという言い方があるけど、家の有ると無しは大きいよね。すごい大きい。

私はだから、「おじさん達とはお友達です」って言えない。

笠井 それは考えすぎだよ。友達が、家をなくしている。

恩田 いや、違う、違う。

ホームレスのおじさんが支援者を友達だって思ってくれたらいいんだけど、自分の方からは思えないよね。

何でかって言ったら、やっぱりさ、家が有る人っていうのは、力なんだよね。

笠井 家が有ろうが、無かろうか、友達は友達さ。

恩田 笠井さんはそう思っているかもしれないけどさ、

家のない人たちはさ、笠井さんと友達になったら得をすることが多いよね。

笠井 そうだよ。だから、寄って来るんだよ。だから、俺は見ているよ。

人によって、求めているものは違う。活動する場所、居場所を求める人。

薬とか、実質的に求めている人もいるし。

恩田 そこに友情は成り立つのかな。力関係があまりにも違う状態で。

笠井 ほとんど、しないよ。90パーセントはね。

友達なんているけど、いない。そんなもんでしょ。

恩田 友達はあるんだよ。

笠井 友達っていうのは突き詰めれば、自分自身なんじゃない。

恩田 他人だからこそ、友達なんだよ。

でも、家のない人に対しては言えない。私は障害者の人と接していて、障害者には友達と言える。明らかに違う。

何でなんだろう。力関係が、あまりにも違いすぎるからかな。

笠井 考えすぎなんじゃない。路上に人がいる。

そこに人間を見いだすわけでしょ。

そこに自分がいるからって話なわけじゃない。

恩田 でもおじさん達は冗談じゃないっていう感じじゃない。

あんた達のためにホームレスやっているわけじゃない。

路上に奏でるハーモニー

橋本 いや、俺はねその、ハーモニーを・・・。

皆 ハーモニー！？

橋本 いやあ、この世の中、今日今晚あたり、何かやりたいなあって、若い男も女も出会いもあるし、そういうハーモニーがあるわけじゃない。

恩田 ハーモニー、あるある。

笠井 やっぱり、近しいから合うんだよね。その、波長がね。路上で波長が合うんだよ。

橋本 そうそう。

恩田 でも、やっぱり、家があって仕事があって、住所があるっていうのは、力なんだよ。人間、お金があれば、プライドを保てるもの。

笠井 やっぱり、おっちゃんの評価はね、遊びに来る人の方が高い。活動をしにくる人は低い。立場を持ち込まない人。酒飲み来るだけとか、そういうタイプの方が評価が高いよね。

恩田 活動をしに来るのは、おじさん達のプライドは傷つくよね。

橋本 まあ、しゃあないわね。でも、何ていうか、全部の面を救わなあかんさかい、同じ升目でいいじゃないの。

皆 升目！？

笠井 升目っていうか、ハーモニーっていうか・・・(笑)。

橋本 尺別の升目っていうか・・・、まあ、升目のない人が来てもいいんじゃない。

恩田 多様性は必要だよね。おじさん達もいろんな人がいるわけだから、いろんな人が来た方がいい。

一時期、「依存」という言葉がはやったよね。

でも、人間関係は、依存なしには、あり得ない。

どっちにしたって、傷つけ合っちゃうんだよね、人の関わりって。

笠井 「依存」、「寄生」、「たかり」。路上にはまると、どろどろだよ。

恩田 笠井さん、新宿の炊き出しがなくなったら、どうするの？

笠井 別の所を探して、やる。職なしは、辛いぜ！

「 露 宿 」

6月、煤けた薔薇が路上に咲く

路上文芸総合雑誌

いよいよ創刊！

路上には人がいる。人がいれば営みがある。営みがあれば笑いがある。笑いがあれば怒りもある。怒りがあれば悲しみもある。悲しみがあるから希望を持つ。希望があるから生きようとする。生きようとするから喧嘩もする。喧嘩をすれば仲直りする。奇妙な偶然で色とりどりの人生が交差する路上。そこにはアブれて酒飲むオッチャンもいる。真面目に働くオッチャンもいる。肩で風きるオッチャンもいる。人生に疲れたオバチャンもいる。能書き垂れの活動屋もいる。ボランティアされにくるボランティアもいる。売れない写真屋や物書きもいる。芸人も時たま遊びに来る。宗教屋も来るし、テレビ屋も来る。救急車も来るし、ときたまおまわりさんもやって来る。

なんだここは？ 掃き溜めじゃないか！

だけど、それでも、それでも、路上で人は生きている。路上は人々を吸引する。新宿の街はそもそも雑踏だ、猥雑だ、ごった煮だ！ 掃き溜めで結構毛だらけ。掃き溜めだからこそ、そこに文化が生まれる。ごちゃごちゃ言うなら路上に來い！ 地獄の底でも人が生きてることを忘れてもらっちゃ困るんだ。慈悲の言葉などケタクソ悪くてヘドが出る。人生の底辺にこそ光を！ 路上にこそ注目を！

そんな息吹を伝えたくって、路上はこんなに辛くておもしろいぞ！ って言いたくて、我ら新雑誌を発刊いたします。ぼんやりとした朝露の光に仄かな希望を託し露の宿でひっそりと暮らす人々の人生喜怒哀劇を瞬間芸の如く切り取って見せます。連絡会運動情報はバツサリと切り捨て、この国初の路上文芸総合雑誌目指し、アスファルトを破り花咲かせる思いで「露宿」は6月に発刊致します。連絡会6年目の全成果をさらけ出し、かつ総力をあげて取り組む破天荒な新雑誌に乞うご期待を！

企画持ち込み、投稿など大歓迎であります。連絡会などに任せてられないと思う強気の編集スタッフ、執筆者大募集しております。我こそはと思う人は「露宿」編集部まで一報を！

*現在「ダンボール村通信」購読者の皆様には引き続き新雑誌を送らせて頂きます。連絡会運動情報（運動日誌や財政も含め）はいつも別冊でお送りしている「連絡会ニュース」に集申し、更にボリュームアップしますのでこちらの方も楽しみに。

「露宿」仮編集部連絡先 090-3818-3450 笠井まで

笠井さんへ

人を助けるなんて、できません。もしそう思う瞬間が合ったなら、それは奢りでしかない。助けられたと感じた人が、相手に感謝するのはわかりませんが。ただ最近、私の気に入っている言葉に「お互い様」というのがあります。これは、身体に障害のある人が、身をもって教えてくれた言葉です。彼女は、自分ができないことを、隣の老婦人に頼み、かわりに自分の得意の料理で、その人の好物を届けているのです。人は人を助けられないけれど、助け合うことはできそうです。それは家のない人と私達との関係にもあてはまりますね？

余談・・・どうもこの頃私はスランプ状態に陥っています。何をすることも自分の意志が定まらないのです。理由があります。ここ数カ月、私は仕事のために試験勉強をしているのですが、答えを頭につめこむ勉強方法が、自分の頭から湧き出る想像力を打ち消しているのです。幼い頃からこんな勉強ばかりしていたら、自分がどうなっていたかと思うとぞっとします。人間から想像力を奪ったら死を意味しますから。

この間初めて外で寝て、寒さが身にしみたと言っていましたね。そして支援者は、皆、外で寝た方が良く、その後それをどう感じるかが大切なのだ。これに限らず、あらゆる場面で感受性を大切にしたいものです。雑誌に掲載されたあなたの文章、書き直しを命じられた箇所を除けば、とても良かったです。あなたが黙って耳を傾けている姿を想像し、家のない人への熱い想いを汲み取ることができました。あなたが新宿に居て良かった!!!

また新宿の路上で逢いましょう。くれぐれも身体を大切に。お互いということん長生きしましょう。希望のために。

恩田 美代子

こんにちは。寒くなりましたね。家のない人達には厳しい季節になりました。元気ですか？ 毎日路上を歩き続けていますか？ そこから何を感じていますか？

あなたが私にこの通信への原稿を依頼してきた意図はなんだろうと考えています。批判してくれる人が必要だから？ 共感してくれる人を求めて？ 新しい仲間を増やしたいから？ たぶん全てYESでしょうね。なんだかあなたの思いが伝わるので、こうして書く気になりました。

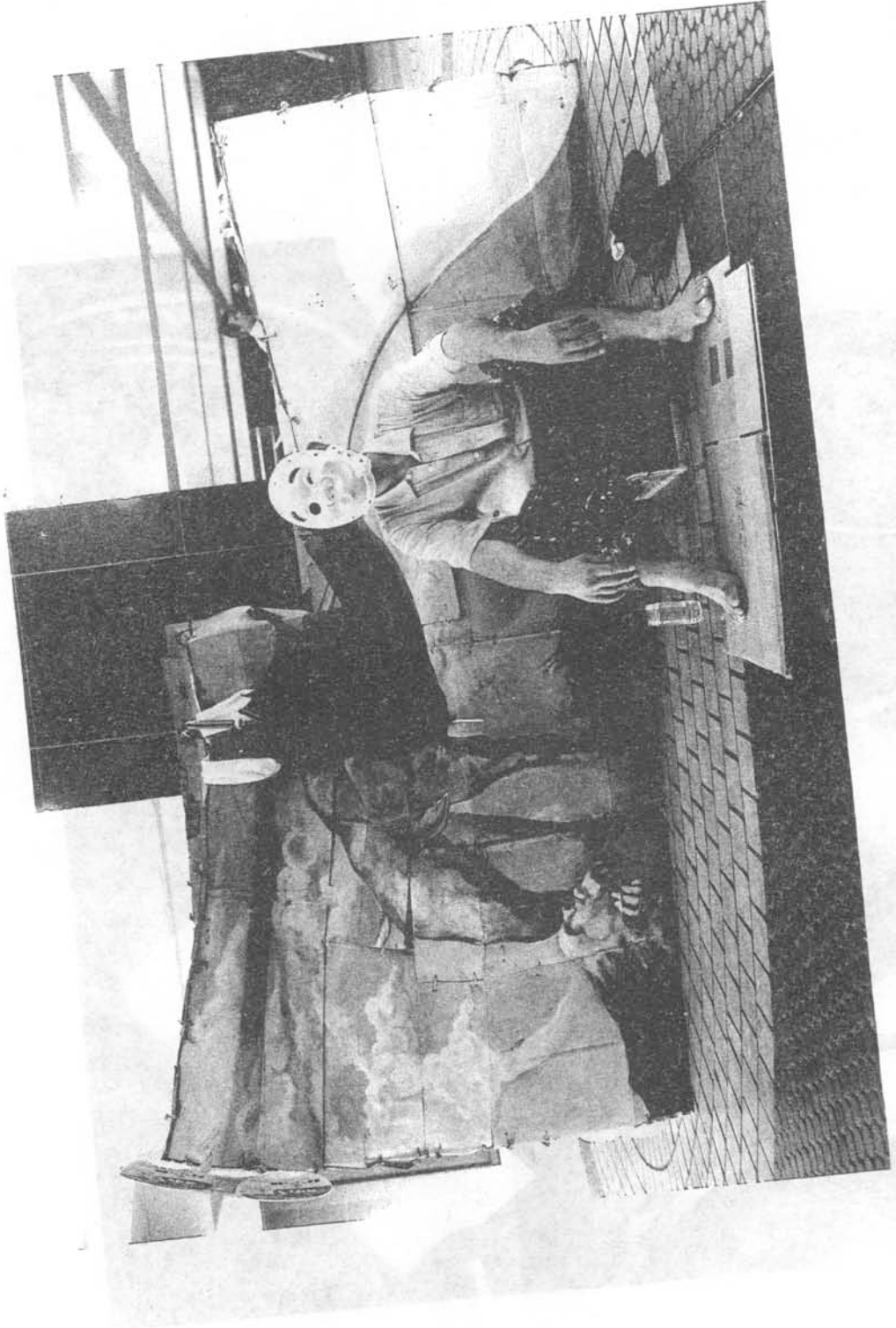
私は以前からあなた達の団体を批判し続けていますが、その度に反感を買っています。確かにあなた達の活動に協力しない私が、その苦勞を殆ど知らずに批判しているのは失礼でしょう。けれど、批判を受け入れない団体では異議を唱える者は、黙って去ってゆくしかありません。それで前に進めるのでしょうか？ あなた達の団体にはこのような体質があり、それに恐怖を感じているのは私だけではない筈です。けれど、あなたは、この体質をなんとか変えたいと思っているではありませんか？

あなたと私では、あまりにも家のない人達に対する関わり方が違うけれど、どこか共通点があるようです。いぜん2人で話した時、「結局支援者はコミュニケーションを図るぐらいしかできないんだ」と言っていましたね。深く家のない人達と関わるあなたの口から、この言葉が出たのは嬉しかったです。たぶん、多くを経験した上で、こういう気持ちになつたのでしょう。私は、たいして深く関わっていないけれど、同感です。支援者は無力です。私達は相手が話をする時、共に居てあげることぐらいしか、できないのです。人が

新宿写真館
VIII

迫川尚子







路上

からの

考察

底辺下層に組み込まれた

「…歓楽街銀座は、震災後おびただしい超スピードで発達した。とりわけカフェーの発達は、その中でも著しいもので、昭和4年11月に、サロン春が出来ると、間もなくクロネコが出来、同5年11月には、銀座会館が出来、更らに7年9月には銀座パレスが出来、今又東洋一を誇るグランド銀座が華々しくスタートを切り、益々其の発展の翼を拡げつつある。」（「銀座解剖図」石角春之助 昭和9年）

「浅草の食堂中で、将来益々発展の可能性を有するものは、言ふまでもなくカフェー、並びに喫茶店である。殊に近来喫茶店の発展は眼醒ましいものがある。」（「浅草経済学」石角春之助 昭和8年）

第一部最終回

VII、昭和恐慌と「ルンペン問題」

「欧州大戦は、日本の大衆をして、経済的に、漁夫の利を占めさせたので、大衆達は、著しくごう奢になり、真面目さを欠くやうになつたのは事実だつた。そして、その結果は、彼等大衆をして、徒らに末梢神経の発達を促し、感覚的に、猟奇的に、きつい刺激を欲する以外、何ものの欲求もなくなつた。即ちこれが纏て、カフェーの発達を促進し、助長せしめるの動機で、同時に又、エロサービス流行の前兆でもあつた。」

震災後の都市社会は、石角が感嘆しながら描いたよう、歓楽街などでは「消費文化」の一大活況を呈し「帝都復興」はさも新たな段階に突入したかのように見えた。歓楽街の文化史的に言えば、おどろおどろした無秩序な「下層文化」から、大衆娯楽という名による着飾った「新中間層文化」への転機（辻芸人や見せ物小屋から寄席や映画館というような）、変遷（娯楽の近代化）の波の中、震災や混沌の時代は終了し、新たな昭和という時代がそこから初声をあげた。震災で焼けただれた密集した下町の裏道や畦道は都市衛生上問題あるとされ、幹線道路、生活

労働者がたどる最下層の還流点

笠井 和明

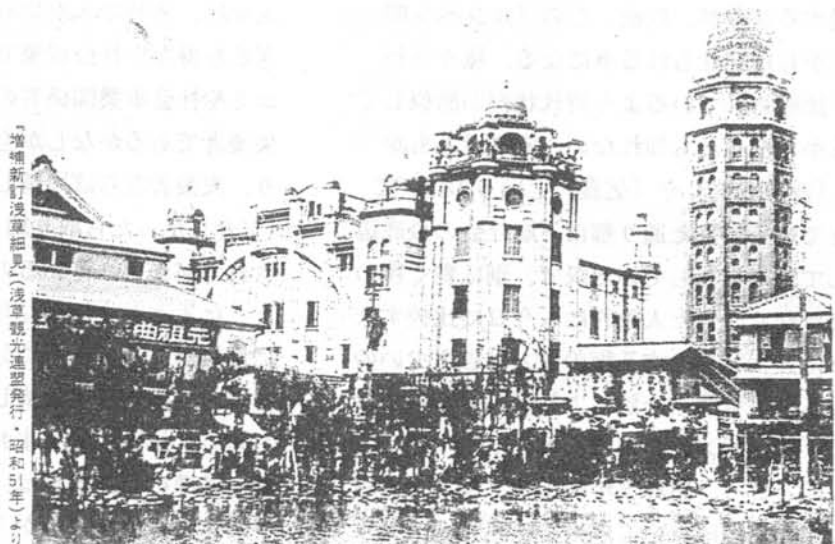
道路が区画整理のもと整備され、雑然として異臭を放つ河川運河は改修され、モダンな橋梁がかけられ、隅田公園、浜町公園、錦糸公園が復興公園として新中間層の憩いの場として作られ、他方で震災後10年で3倍ともなった郊外部の人口増は、近郊農村の宅地化や、新宿、大塚、池袋、渋谷の駅前が都市計画事業化されるなど、東京の市域拡張、都市化の外延化をもたらして行った。

もちろんデパートやカフェの出現などに象徴される「モダン」と称する近代化はあくまで表層のみの、そして、新中間層化した人々のみが享受出来る文化でしかなかった。

貧民窟はもはや都心部においては解体され、「下層社会」の長屋住宅は荒川放水路以西などに追いやられ、わずか木賃宿のドヤ街でだけ自由労働者は日銭がある時だけ破れた畳の上で眠れた。これら、下層の大衆にとって近代化された都市はまことに

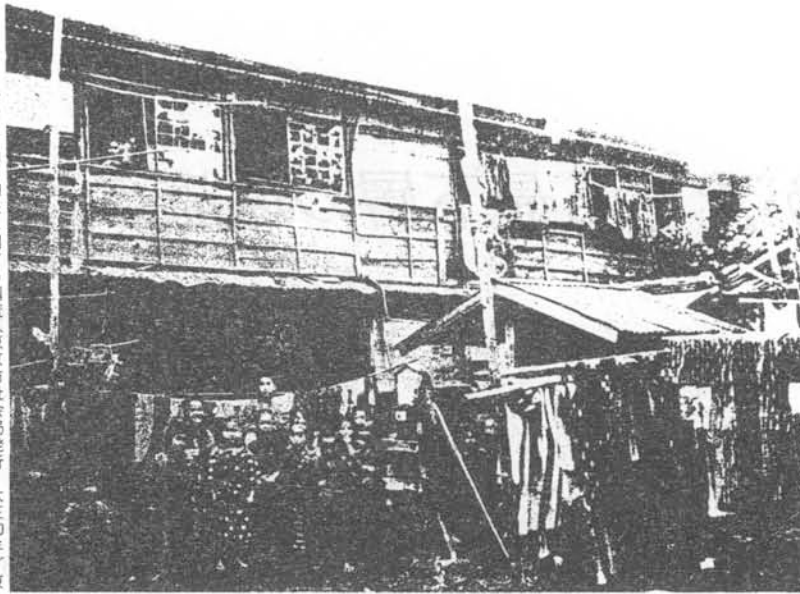
住みづらくなって行ったのである。

都市下層の存在は、その都市の表層からは限りなく見えなくされた。無論、それは見えなくさせられただけの話で、それらの必死に生きる息吹(バイタリティ)は自らの歴史と文化を作り出す。何故なら近代化すなわち資本主義化にとって、彼・彼女らの存在はその発展の基礎を作るために必要な人々であったからであり、都市下層が教科書的に新中間層に取って変わった訳ではなかったからである。そして、近代化された政治においては、これらの人々を見えなくさせるのは極めて重要な仕事であり、その息吹を潰す事も為政者にとって肝心な仕事であった。



増補新訂浅草細見(浅草観光連盟発行・昭和5年)より

東京都立中央図書館蔵より
東京市内の細民に関する調査（東京市社会局発行・大正10年）東



超高層ビルが立ち並ぶ西新宿に突如「ホームレス群」が出現し社会から注目されたのと同じよう、復興された浅草隅田公園に突如「ルンペン群」が出現し世間に注目をされるのが昭和2・3年頃である。おもしろい事に「経済不況」「失業」「極貧形態」「集団化」「迷惑」「排除」「収容」「対策」という今日と共通する語彙が、以後、この「ルンペン問題」からは発せられる事になる。様々言われ、比較されているよう時代状況が酷似しているからなのかも知れない。それはともかく、「浮浪者群」や「乞食」というのは、これまで述べて来た通り都市下層社会の最底辺として常に存在していた訳で、別に驚く程の事ではなく、また人数的にも今日に比較すればさほど大騒ぎをする程の数とは思えないのであるが（草間八十雄によれば、東京市における「ルンペン」の数は、大正14年が380人のところ、昭和5年に1799人と、昭和に至る過程において急増し、昭和5、6年に最大のピークを迎えている。この当時の

「ルンペン」の最大の集住地は浅草公園であり昭和6年には浅草公園とその周辺だけで602人を数えている）、金融恐慌と世界恐慌と続く昭和初期の大量首切りと倒産により失業者が激増し、植民地はおろか国内各地においても大規模な労働争議や、小作争議の嵐が吹き荒れるという社会不安を背景に、モダンな都市に出現した極貧状態の人々は、当時の人々に取ってみれば嫌でも注目せざるを得ない社会現象であったのであろう。マスコミや社会事業関係者の議論も、これらの人々は失業者であるかなしかを最大の注目点としており、失業者ならば同情してやろう、「浮浪者」や「乞食」だったら取り締まってやろう的な注目のされ方がなされているのは、これまた今日と同じようにまことに滑稽な発想である。一体そのどこに境目があるのか全く分からないのであるが、失業者なら差別せず救済しようとし、「浮浪者」なら差別し排除してしまおうとする悪しき労働価値観を基準にした発想は、もうすでに確立していたと言うことであろうか？

もちろん、これらの同情も結局は功を奏せず、

「ルンペン」と称された人々は、失業者とは結果的には認定されず、「迷惑論」や「体面論」をかざす人々から一方的に「浮浪者」「乞食」とされてしまうのである。かつて、戦後一貫して「乞食生活」をしていると言う老人から「この世界は注目されるとロクなことではない世界だ」と聞かされたことがあるが、けだしその通りであり、この問題も、社会事業家や識者がピーチクパーチク熱い議論を交わしている間に、警察主導の「ルンペン狩り」や取締りが強行され、有無を言わずトラックに乗せられた「ルンペン」は養育院や民間の救済事業施設などへ次々と引き渡されて行くことになる。「ルンペン」はこれらの警察主導の対応で瞬く間に人々の見える場

所からは姿を消し、その後の戦時経済への突入により失業問題が解消して行く過程で、その後も戦後までは問題とされることなく人々の記憶から忘れ去られて行った。浅草から消えた「ルンペン」が、その後どこへ行き、どうなったのかさえ、「問題」を作った人々に関心を示さなかった。

『今度の象潟署長は公園の「浄化」に大奮だ。飲食店の取締りも俄かに嚴重となり、乞食にまで免許状を持たせた。浅草祭の翌月も、お盆の7月15日から、またかりこみ（不良狩り）を半月も続けて、辻本の話だと、警視庁の例の新選組が6人も出張した』（川端康成「浅草祭」）「ルンペン」を浄化した後の浅草は、同時に露店や家出少年達や路上売春などの取締りも嚴重となり、かつての雑然とした活気が失われ、「魂が抜けた、陰がな

くなった、底がひからびた」「寂れゆく浅草」と化し、仲見世の入り口などに「従来の不良分子は悉く一掃されました。安心してお出下さい」なる看板が立っていたと言う。

「問題」を作りだした人々の意向を通り抜け、「問題」を隠蔽する側の方が、この時期、様々な社会運動を鎮圧して来たよう、格段に強力な体制を敷き、都市に宿る不安の種を刈り取った訳である。もちろん、これは隠蔽しただけの話で、極貧状態にある人々を社会の力でその極貧から抜け出す方途を提供した訳ではないし、そのバイタリティを社会的に生かして来た訳でもない。唯、見える所から、それらの人々を排除し、管理しただけである。

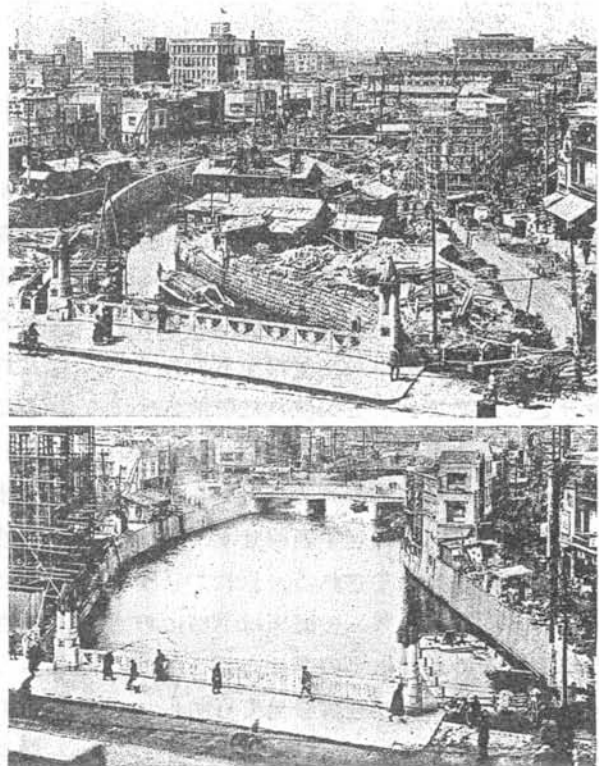


図1-27 京橋川の改修 (上)工事中 (下)竣工後 幅員は33m.



帝都復興事業の区画整理の施行地区

国施行	15 地区	4,966,410 m ²
市施行	50 地区	26,223,560 m ²
合 計	65 地区	31,189,970 m ²

ある種の問題化というのは、「失業者」に表現される同情（これは恐らく自分もそうなる事への不安の現れであると考えるが）も含まれていることが多々あるが、それをも含めてバツサリと切り捨て、一方の流れに収斂させて行こうとする力というのは空恐ろしいし、もっと恐ろしいのは、それへの抵抗すら成されず、また疑問すらも感ぜず表明せず、同情すら目の前から見えなくされると忘れてしまう事であろう。ファシズムの温床は下層にあるどころか、このように別の所にあることが、この「ルンペン問題」の経緯を見ても明らかではないだろうか？

社会矛盾の発生は、為政者にその「対策」が求められる。その諸矛盾が集中する都市に

おいては尚更であり、国においては大正9年に内務省内に社会局が新設され、同11年には外局の社会局が発足した。また東京市は大正8年に社会局を設置し、以降、都市社会政策の先駆的なセクションとして矢継ぎ早に政策を打ち出して来る。それ以前の東京市の救済事業の中心は養育院（行路病人や極貧者の収容施設）にあり、市立職業紹介所も養育院下の管理であり、救貧上の必要から必要最低限の事をしていたに過ぎず、宿泊所とセットとなった職業紹介所や仮設収容所への臨時収容などの救済策も、本願寺や救世軍などの民間の社会事業が主要には担っていた。

ここでは、失業問題の発生とそれへの対応に絞って見るとするが、失業問題が社会的に顕在化した一次大戦後の経済恐慌時に、国際情勢を反映しての労働争議

における要求や帝国議会における議論などがあったものの、日本においては、失業保険という制度を編み出す事なく、失業対策は大正10年に職業紹介法を制定し、公営の職業紹介施設を設置したのみで、失業救済事業は基本的に地方行政にまかす方法を取ることとなる。もちろん、これのみならず工場法の制定問題でも顕著なように、欧米列強諸国と比較して社会政策は後進国日本においては決定的に遅れており、急激な資本化と軍事国家への参入という国家路線の中、当然にもわが国の労働者保護政策の観点は圧倒的に低かった。

さて、それでは東京における失業対策はどのようなものであったのか？東京市においても大正期「工業労働及ビ其他勞務ノ需給調節並府内職業紹介所ノ事業ノ連絡ヲ図ル」東京府立職業紹介所を中心に紹介所網を整備し、宿泊事業、授産・内職紹介、児童保護、汽車汽船運賃割引などの関連事業、大正末まで住宅供給紹介事業

や、簡易公営食堂や公設浴場、公益質屋の設置までも含め、震災の寄付金などを根拠に社会事業を矢継ぎ早に打ち出して行く。帝都復興期であるという特殊な時期であった事もあるが、それにしても乱発に近い失業救済施策のオンパレードである。救済政策にはあまりにも冷淡であったにもかかわらず、「職業紹介事業に従事する当事者に於いては旧態依然として伝統的の慈善救済事業的の観念から一步もせず（略）斯る活動は社会事業家のセンチメンタリズムを満足せしむることは出来るかも知れないが、産業上には何等の貢献をも為し得るものではなかった」（豊原又男）なる、産業上必要であるというような主張には行政は機敏に対応をする。全国で11%もの紹介率を占めたと豪語する東京府紹介所は、このように産業上の貢献を十分に果たした訳である。もちろん、それならず、震災直後から帝都復興に関わる単純労働を求めて地方から都市部に流れてくる大量の日雇労働力の予備軍を、どう配置し、どう復興作業に従事させるのかという点も当然考慮されている筈である。当時の職業紹介所は主要には日雇斡旋所と言っても過言でない業務内容であり、また、産業界も大量の単純労働力を求めていた関係上、失業対策の名目でもって単純労働力を配置させる機能を行政に強く求めていたものと伺える。すなわち、労働者保護を観点とする失業保険などの制定をサボタージュし、産業上の理由により安価な労働力を大量に仕入れる作業を国家に求めたのである。が、故にこの時期の失業対策は日雇労働分野に必然的に集中することとなった。

その産業上単純労働が大量に必要であった帝都復興が一段落した時、今度は別の次元の失業問題が発生する事となる。すなわち、自らの必要で大量にかき集めた日雇労働者の供給過剰となり、都市部に滞留するという事態である。この昭和恐慌へと至る時期は、中小零細企業の倒産や工場労働者の首切りなどによる「不況型の

失業問題」と合わせ、日雇労働者の「政策的な失業問題」も重なりあった複合的な失業問題が発生した訳である。ここに本格的な失業対策が求められるにもかかわらず、政府および、地方行政は、日雇労働者の失業救済事業を六大都市で試みたのみで、労働者保護政策とりわけて、本格的な失業対策施策制定の道を取らず、失業の困窮を放置し、強制したまま無謀な対外侵略の道を駆け抜けることとなる。

失業者の救済のため公共土木事業を実施するとされた日本初の失業救済事業の経歴と失敗の歴史的な考察は加瀬和俊の「戦前日本の失業対策」に詳しいが、日雇失業者を固定的な層として想定し、潜在的な失業予備軍が都市底辺、農村、植民地に大量に存在することと、失業救済事業の結果その流動化をもたらすであろうことが認識されなかった事や、効率性を追及する産業と失業者救済を名目とする行政との矛盾などが適格に論証されている。この点を克服できずに制限的に縮小していく失業救済事業は、その予算規模の大きさにもかかわらず当然ながら全体の失業情勢から見れば微々たる効果しかあげられなかった。

「…昭和8年ごろから失業はざんじ解消されていくが、昭和13年ごろからの本格的経済の軍事化によって、職業紹介所は戦時労務統制・戦時労働力調達機構として、これまでの市町村公営の紹介機関は国営に改組され、その名も国民勤労働員署と改められ、軍事的要請にもとづいてはじめて全国的に組織整備されるようになった。そして戦時労働力の強制徴用機関として、従来の消極的な失業救済機関としての装いをかなぐり捨て、積極的な雇用統制機関として名実ともに強化発展していくのである。そして戦前における日本の失業対策の中心は、戦争経済の進展にともない、失業救済土木事業から戦争労務統括=供給機構としての、社会政策ならぬ職

業紹介所へと移行していくのである。わが国の失業（問題）は、奇妙にも戦争経済によってのみ暴力的に解消されえたのであり、じらい政府に、最大限利潤の獲得を希求する資本主義経済にとって、戦争経済こそ強力な失業政策＝もっとも合理的な失業解決策であるとの大きな錯覚を起させるにいたったのである。」（菅谷章「日本社会政策史論」）

「失業者」に対する社会的な同情は、これらの政策としてある意味では表現された。しかも、産業上必要な肉体単純労働力を確保するという大きな目的があったからこそである。その果てが土木建築、炭鉱山、港湾などでの過酷な拘禁労働、そして植民地からの強制連行による強制労働であった事は歴史が教える事である。

「失業者」に対してでさえ、このような扱いであったが故に、それ以下とされた「都市下層」の人々に対しては追って知るべしである。昭和7年に施行された救護法は、その対象は65歳以上の高齢者、13歳以下の幼者、妊産婦、障害者であり、かつ貧困で生活できない者に徹底して限定した公的救済制度であり、救貧対策についてこの国はこれ以上も以下もやらずに都市下層を隠蔽しながら放置、棄民し続けて来たのである。

が、それは悲劇や絶望だけではない、社会政策や社会福祉などは、いつの時代においてもそこから排除する人々を作りだす。そんなものには何等期待をせず、棄民されまいとする自然な抵抗の源泉は都市下層には脈々と受け継がれている。中川信夫によれば、昭和恐慌時に都市下層の職業構成の変動は長期の失業として顕在化はしておらず、「露天商」「紙芝居」「駄菓子屋」など雑業型にそれらは吸収されていったと指摘している。『昭和5年にか

けて、「むしろ商業・サービス業等への就業が急速に進展し」、「都市型の、とくに商業を中心とする在来産業が拡大し」た。このような都市における「大量の『在来的』サービス業」こそ「帰村しないものの失業の滞留地であり、かつまた『低位就業』先であった」というのが大まかな研究動向である。』（「日本の都市下層」）このように、恐慌の打撃を真っ先に受けた都市下層は、為政者の力を借りずに独力で生活を防衛しようとは必死になった。近代化された都市、消費文化への変貌をすかさず利用し、様々な雑業的な生業をもって都市で生き延びようとしたのである。もちろん、その列には「乞食」も含まれ、排除されても、収容されても、そこから逃げおせ、都市の片隅で彼・彼女らは生き抜いた。

また、「自由労働者」として産業に組み込まれた下層の人々も、植民地からやって来た「失業者」も、失業救済事業に対し、各地の職業紹介所において、そして飯場においてでさえも、様々な抵抗を試み、生きる証しを刻印して行った。それらは勝利として終わってはいないが、生き抜く事で棄民を拒否し抜いたという意味では、「動員」をされようが、されまいが、排除されようがされまいが、それは決して敗北ではない。そして、それはまた社会運動に組織されていたか否かの問題ではなく、賃労働と資本だけの関係でもなく、それら旧来の価値観を覆すが如きの貧乏人の血叫びの抵抗として、「浮浪者」のオッチャンの抵抗も、「乞食」のオッチャンの抵抗も、屋台のオッチャンの抵抗も、屑屋のオッチャンの抵抗も、内職するオバチャンの抵抗も、また、土方のオッチャンの抵抗も、在日のオッチャン、オバチャンの抵抗も、等しく評価しなければならぬ問題だろう。都市下層が都市下層として、その血塗られた姿を排除される事なく社会に示して行くため、他人から問題視されるのではなく自らが自らを問題視させて行くためには、下層の人々の生き方をまっとう

に評価する事からしか始まらないであろう。

「ルンペン」は果たして「失業者」であったのか否か？そんな事はもはやどうでも良い事である。「問題化」の中で、どこかの国のようにガス室に送られなかっただけ不幸中の幸いであった。無宿人にせよ、「ルンペン」にせよ、都市下層は、人々の異端視や差別視、そして取締りや政策など、これらの社会から排除せんとする圧力から、必死に逃れ、抵抗し、生き延びる事から、自らの歴史を作りだそうとしている。そのことだけを確認すれば良い。

「私は浅草に生まれも育ちもせぬ。故郷という言葉の意味がちがう。だが、一日に二十万も七十万も浅草公園に流れこんで来る人達のうちには、ここを故郷ならぬ故郷と思う人間がどんなに多いことか。失業者や家出人や犯罪者は、なぜ先ず浅草に足を向けるか。自分というものをそのなかに隠したり、忘れたりするのに、一番具合いい雑沓が、なぜここにあるか。一口にいえば、浅草公園は恵まれぬ大衆がここに棄てる、生活の重みと苦しみとがもうもうと渦巻いて、虚無の静けさに淀み、だから、どんな賑やかな騒ぎも寂しく聞こえ、どんな喜びも悲しげに見え、どんな新しさも古ぼけて現れるのだ。けちな消費が凝集すると、暴力的な喰りを立てて、塵芥も踊って流れる洪水となるが、川辺の雑草のなかから、秋の虫のように郷土詩人の歌が聞こえる」(川端康成「浅草祭」)

(第一部了)

あとがき

ながいながい連載となってしまいました、
「ダンボール村通信」最終号と共に、この論文も終了させて頂きます。読者からの暖かい励ましの声があったからこそ、ここまで書き進める事が出来ました。感謝しております。また、最大限注意したつもりですが、私は学者でも研究者でもないので史実については誤記があるかもしれません。指摘下されば幸いです。

長々と書き続けてきたので、読者には主旨は理解されていると思いますが、何もこれは昔話しを書きたかった訳ではなく、まさに今の問題として、とりわけ野宿者運動の思想上の問題として書いたつもりであります。その点があまり運動をしている人々に理解されていないのは歯痒いばかりであります、伝わらなかったのなら筆者の力不足でありましょう。そのための努力や挑発を今後致して行くつもりです。

尚、戦後史を含めた続きの「第二部」は、また必要に応じてどこかで書きたいと考えています。それまでこれは「未完の大作」(?)という事にしておいて下さい。では。

99年4月 笠井和明

引き続き暖かいカンパ宜しくお願い致します

春に入り、懸案の自立支援センター開設問題が正念場を迎えつつあります。そして、国政レベルの動きも活発化するなど、私達の声を大きく社会に訴えていくため様々な行動が必要な時期になりました。また、炊き出しの食数もこのところ700食に近付く勢いで増加し、他方で新しく始まった池袋の日常活動も連絡会が支えなければなりません。このような活動の広範化を支える資金面での支援を私達は強く求めています。読者の皆さんには度重なるお願いになってしまいますが、引き続きのカンパ、そして、カンパ網の拡大など出来る範囲でのご協力お願い致します。集まった資金、物資は野宿の仲間の権利を獲得するため無駄なく使わせて頂きます。

(事務局一同)

会計報告 (99年2月～3月)

収入		支出	
郵便振替カンパ	25口 123,670	炊事関連費	372,892
通信会員費	12口 57,000	交通費	258,710
通信売上	11,800	印刷費	41,526
個人団体カンパ	19,000	文具図書費	15,863
	計 211,470	発送費	35,000
前期繰越金	1,758,624	車両関連費	2,000
		電話代	23,083
		会場費、使用料	95,014
		薬医療関連費	28,836
		毛布	102,900
今期貸付金	152,551	備品	8,580
(前期貸付金	401,848)	全部実分損金	17,592
次期繰越金	731,232	池袋活動費	71,000
		雑費	12,315
		計	1,086,311

「季刊 SHELTER-LESS」 創刊!

野宿者人権資料センターの機関誌が、市販されることになりました。

No. 1の内容

特集 「野宿者と福祉

——福祉のセーフティは機能しているか——

目次・寄る辺なき社会・・・中村智志 (朝日新聞)

- ・全国生活保護行政アンケート
- ・対談「エサとりのない社会を」
- ・野宿に関する情報クリップ

発行 野宿者人権資料センター TEL/FAX 03-3226-6845

発売 現代企画室 定価600円 (外税)

全国の書店でお求めになれます

通信の中で宣伝しましたように、新雑誌「露宿」、6月に創刊されます。現在、まだまだ準備段階です。路上に関心の高い人、雑誌づくりに興味のある人、ぜひぜひ、この機会に、一緒に「露宿」を創りあげていきませんか? 我こそはと思われる方、ちょっと覗いて見たい方も、大大歓迎です。お気軽に、ご連絡を!

編集・発行: 新宿野宿労働者の生活・就労保障を
求める連絡会議 (新宿連絡会)

連絡先: ☎ 111 東京都台東区日本堤1-25-11

山谷労働者福祉会館 気付

: ☎ 03-3876-7073

: FAX 03-3876-1869

現地: ☎ 090-3818-3450